

PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number : 07-160292

(43)Date of publication of application : 23.06.1995

(51)Int.Cl.

G10L 7/04
G10L 9/18

(21)Application number : 05-306898

(71)Applicant : SONY CORP

(22)Date of filing : 07.12.1993

(72)Inventor : AKAGIRI KENZO

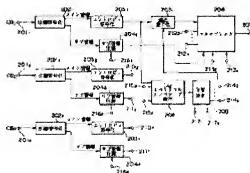
(54) MULTILAYERED CODING DEVICE

(57)Abstract:

PURPOSE: To improve compressibility and to perform bit distribution among channels by detecting energy for each channel and performing encoding in which information quantity of each channel is allocated with a ratio in accordance with this detected output.

CONSTITUTION: This device has compression-encoding circuits 2021-202n and entropy encoding circuit 2031-203n being a first encoding means in which digital audio signals of each channel CH1-CHn are inputted and the digital audio signals are compression-encoded. This device has also a second encoding means in which an output encoded signal of the first encoding means is supplied, energy for each channel is detected, and encoding is performed in which

information quantity of each channel is allocated. This second encoding means has a Log spectrum envelop detecting circuit 208, a distribution deciding circuit 209, an adaptive quantization circuits 2031-203n, and a sub-information compression circuit 2041-204n. Thereby, bit distribution among channels and high compressibility can be realized.



(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開平7-160292

(43) 公開日 平成7年(1995)6月23日

(51) Int. Cl. ⁶	識別符号	序内整理番号	P I	技術表示箇所
G 1 0 L	7/04	G		
	9/18	C		

審査請求 未請求 請求項の数 1 ○ L (全 13 頁)

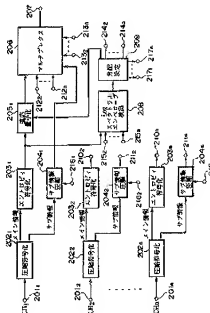
(21) 出願番号	特願平5-306998	(71) 出願人	000002185 ソニー株式会社 東京都品川区北品川6丁目7番35号
(22) 出願日	平成5年(1993)12月7日	(72) 発明者	森岡 健三 東京都品川区北品川6丁目7番35号 ソニー株式会社内
		(74) 代理人	弁理士 小池 晃 (外2名)

(54) 【発明の名称】 多層符号化装置

(57) 【要約】

【構成】 各チャネルCH1～CHnのデジタルオーディオ信号を圧縮符号化する圧縮符号化回路202、～202、及びエンロピ符号化回路203、～203。と、メイン情報（圧縮符号化されたデジタルオーディオ信号）から各チャネル毎のエネルギーを検出してこの検出結果に応じた比率で各チャネルのビット配分を決定するlogスペクトラルエンベロープ検出回路208及び配分決定回路209と、この配分決定回路209からのビット配分情報に基づいて、適応量子化回路205、～205、においてメイン情報を適応的に量子化すると共に、サブ情報圧縮回路204、～204、においてサブ情報（諸長情報やスケールファクタの情報）を圧縮する。

【効果】 チャネル間ビット配分と高圧縮とを実現する。



(2)

特開平7-160292

1

【特許請求の範囲】

【請求項1】 複数チャネルのデジタルオーディオ信号を多層符号化する多層符号化装置において、各チャネルのデジタルオーディオ信号が入力され、当該デジタルオーディオ信号を圧縮符号化する第1の符号化手段と、

上記第1の符号化手段の出力信号が供給され、チャネル毎のエネルギーを抽出し、この抽出出力に略応じた比で、各チャネルの係数値を割り当てる符号化を行う第2の符号化手段とを有してなることを特徴とする多層符号化装置。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【産業上の利用分野】本発明は、例えば、映画フィルム映写システム、ビデオテープレコーダ、ビデオディスクプレーヤ等のステレオや、いわゆるマルチサ라운드音響システムにおいて用いられるマルチチャネルのデジタルオーディオ信号を圧縮符号化する多層符号化装置に関するものである。

【0002】

【従来の技術】オーディオ或いは音声等の信号の高周率符号化の手法及び装置には種々あるが、例えば、時間領域のオーディオ信号等を単位時間毎にブロック化してこのブロック毎の時間領域の信号を周波数軸上の信号に変換（直交変換）して複数の周波数帯域に分割し、各帯域毎に符号化するブロック化周波数帯域分割方式、いわゆる変換符号化（トランスフォームコーディング）や、時間領域のオーディオ信号等を単位時間毎にブロック化しないで、複数の周波数帯域に分割して符号化する非ブロック化周波数帯域分割方式である帯域分割符号化（サブバンドコーディング：SBC）等を挙げることができる。また、上述の帯域分割符号化と変換符号化とを組み合わせた高周率符号化の手法及び装置も考えられており、この場合には、例えば、上記帯域分割符号化で帯域分割を行った後、該各帯域毎の信号を周波数領域の信号に直交変換し、この直交変換された各帯域毎に符号化が施される。

【0003】ここで、上述した帯域分割符号化の帯域分割用フィルタとしては、例えばQMF等のフィルタがあり、これは1976 R.E.Crochiere Digital coding of speech in subbands Bell Syst.Tech. J. Vol.55, No.8 1976に、述べられている。また、ICASSP 83, Boston Polyphase Quadrature Filters-A new subband coding technique Joseph H. Rothweiler には等バンド幅のフィルタ分割手法及び装置が述べられている。

【0004】また、上述した直交変換としては、例えば、入力オーディオ信号を所定単位時間（フレーム）でブロック化し、該ブロック毎に高速フーリエ変換（FFT）、コサイン変換（DCT）、モディファイドDCT変換（MDCT）などを行うことで時間軸を周波数軸に

2

変換するような直交変換がある。このMDCTについては、ICASSP 1987 Subband/Transform Coding Using Filter Bank Designs Based on True Domain Aliasing Cancellation J.P.Princen, A.B.Bradley Univ. of Surrey Royal Melbourne Inst. of Tech.に述べられている。

【0005】更に、周波数帯域分割された各周波数成分を量子化する場合は周波数分割幅としては、例えば人間の聴覚特性を考慮した帯域分割幅がある。すなわち、一般に聴覚帯域（クリティカルバンド）と呼ばれている高域帯域幅が広くなるような帯域幅でオーディオ信号を複数（例えば25バンド）の帯域に分割することがある。また、この時の各帯域毎のデータを符号化する際には、各帯域毎に所定のビット配分或いは、各帯域毎に適応的なビット配分による符号化が行われる。例えば、上記MDCT処理されて得られた係数データを上記ビット配分によって符号化する際には、上記ブロック毎のMDCT処理により得られる各帯域毎のMDCT係数データに対して、適応的な配分ビット数で符号化が行われることになる。

20 【0006】上記ビット配分手法及びそのための装置としては、次の2手法及び装置が知られている。IEEE Transactions of Acoustics, Speech, and Signal Processing, Vol. ASSP-25, No.4, August 1977 では、各帯域毎の信号の大きさをといて、ビット配分を行っている。また、ICASSP 1980 The critical band coder-digital encoding of the perceptual requirements of the auditory system M.A. Krasner MIT では、聴覚マスキングを利用することで、各帯域毎に必要な信号対雑音比を得て最適なビット配分を行う手法及び装置が述べられている。

【0007】ここで、例えば上述のようなサブバンドコーディング等を用いたオーディオ信号の高周率圧縮符号化方式においては、人間の聴覚上の特性を利用し、オーディオデータを約1/5に圧縮するような方式が既に実用化されている。なお、このオーディオデータを約1/5に圧縮する高周率符号化方式としては、例えばいわゆるA T R A C (Adaptive Transform Acoustic Coding) と呼ばれる方式が存在する。

【0008】さらに、通常のオーディオ録音の場合のみならず、例えば映画フィルム映写システム、高品位テレビジョン、ビデオテープレコーダ、ビデオディスクプレーヤ等のステレオないしはマルチサ라운드音響システムにおいては、例えば4～8チャネル等の複数チャネルのオーディオ或いは音声信号を扱うようになりつつあり、この場合においても、ビットレートを削減する高周率符号化を行うことが望まれている。

【0009】特に、業務用においては、デジタルオーディオのマルチチャネル化が進んでおり、例えば8チャネルのデジタルオーディオ信号を扱う機器が浸透してきている。上記8チャネルのデジタルオーディオ信号

(3)

特開平7-160292

3

を扱う機器としては、例えば映画フィルム映写システム等がある。また、高品位テレビジョンビデオテープレコーダ、ビデオディスクプレーヤー等のステレオないしはマルチサウンド音響システムにおいても、例えば4～8チャンネル等の複数チャンネルのオーディオあるいは音声信号を扱うようになりつつある。

【0010】ここで、上記8チャンネルのデジタルオーディオ信号を扱う映画フィルム映写システムにおいては、上記映画フィルムに対して、例えばレフトチャンネル、レフトセンターチャンネル、センターチャンネル、ライトセンターチャンネル、ライトチャンネル、サウンドレフトチャンネル、サウンドライトチャンネル、サブウーファチャンネルの8チャンネルのデジタルオーディオ信号を記録することが行われる。なお、上記映画フィルムに記録する上記8チャンネルの各チャンネルは、例えば当該映画フィルムの画像記録領域から再生された画像が映写機によって投影されるスクリーン側に配置されるレフトスピーカ、レフトセンタースピーカ、センタースピーカ、ライトセンタースピーカ、ライトスピーカ、サブウーファスピーカ、観客席を取り囲むように左側に配置されるサウンドレフトスピーカ及び右側に配置されるサウンドライトスピーカと対応するものである。

【0011】ただし、映画フィルムに上記8チャンネルのデジタルオーディオ信号を記録する場合において、映画フィルムには、例えばいわゆるC D（コンパクトディスク）などで用いられているようなサンプリング周波数44.1 kHzで16ビットの直線量子化されたオーディオデータを上記8チャンネル分も記録できる領域を確保することは困難であるため、上記8チャンネルのオーディオデータを圧縮して記録されるようになされる。例えば、当該8チャンネルのデジタルオーディオデータを圧縮する圧縮方法としては、上述したような人間の聴覚の特性を考慮して最速ビット割り当てを行うことによって、例えばいわゆるC D（コンパクトディスク）などに記録されるようなサンプリング周波数44.1 kHzで16ビットのデジタルオーディオデータを約1/5に圧縮しながらも、C D並の音質を達成する高効率符号化方式（いわゆるA T R A C方式など）を適用するようになっている。

【0012】また、フィルムという媒体は、表面に傷などが発生しやすいため、デジタルデータをオリジナルのまま記録していただくのではなく、データ欠けが激しく実用にならない。このため、エラー訂正符号の能力が非常に重要になり、上記データ圧縮は、その訂正符号も含めて上記フィルム上の記録領域に記録可能な程度まで行う必要がある。

【0013】

【発明が解決しようとする課題】しかし、上述のようなマルチチャンネルのオーディオ信号を高効率符号化方式では、各チャンネル毎に圧縮が行われるため、全体とし

4

てのビット配分量（バイト配分量）が必ずしも有効に使用されているとは言い難い。例えば、あるチャンネルには少ないビット配分量でもよいが、他のチャンネルではより多くのビット配分量を必要とする場合がある。このように、従来の高効率符号化方式では、各チャンネルにわたってビット配分量（バイト配分量）を眺めることと無駄が多いと思われる。特に、各チャンネル毎にビット配分量（あるいはバイト配分量）が固定されている場合には、上記のような無駄がさらに顕著になると考えられる。近年は、さらに圧縮率を高めることも望まれている。

【0014】そこで、本発明は、上述したようなことに鑑み、より圧縮率を高めることができると共に、チャンネル間のビット配分量をも可能とする多層符号化装置を提供することを目的としている。

【0015】

【課題を解決するための手段】本発明は、上述の目的を達成するために提案されたものであり、本発明の多層符号化装置は、複数チャンネルのデジタルオーディオ信号を多層符号化するものであり、各チャンネルのデジタルオーディオ信号が入力され、当該デジタルオーディオ信号を圧縮符号化する第1の符号化手段と、上記第1の符号化手段の出力符号化信号が供給され、チャンネル毎のエネルギを検出し、この検出出力に略応じた比率で、各チャンネルの情報量を割り当てる符号化を行う第2の符号化手段とを有してなることを特徴とするものである。

【0016】

【作用】本発明によれば、第1の符号化手段で各チャンネルのデジタルオーディオ信号を圧縮符号化した後、この第1の符号化手段の出力符号化信号に対して、さらに第2の符号化手段によってチャンネル毎のエネルギに略応じた比率で、各チャンネルの情報量を割り当てる符号化を行うことでチャンネル間のビット配分と高圧縮率を実現している。

【0017】

【実施例】以下、本発明の実施例について図面を参照しながら説明する。

【0018】図1には、本発明の実例の多層符号化装置の要部の構成を示す。

【0019】本発明の実例の多層符号化装置は、この図1に示すように、複数チャンネルC H 1～C H nのデジタルオーディオ信号を多層符号化するものであり、各チャンネルC H 1～C H nのデジタルオーディオ信号が入力され、当該デジタルオーディオ信号を圧縮符号化する第1の符号化手段としての圧縮符号化回路202、～202。と、上記第1の符号化手段のエントロピー符号化回路203、～203。からのメイン情報の符号化回路（圧縮符号化回路202、～202。からの圧縮符号化されたデジタルオーディオ信号）が供給されてチャンネルC H 1～C H n毎のエネルギを検出するL o g スケットラ

(4)

特開平7-160292

5

ルエンベロープ抽出回路208と、このL0バスケット
 ルエンベロープ抽出回路208からの抽出出力に略定
 じた比率で各チャネルに割り当てる情報量を決定する
 (ビット配分を行う)配分決定回路209と、この配分
 決定回路209からビット配分情報に基づいて、適応
 変調回路205、～205。(回路205、～205)
 の図示は省略)において上記エントロピー符号化回路
 203、～203。からのメイン情報の符号化信号を適
 応的に変調化すると共に、サブ情報圧縮回路204、
 ～204。において上記圧縮符号化回路202、～202。
 からのデジタルオーディオ信号の圧縮符号化に関連
 するサブ情報(延長情報やスケールファクタの情報)
 を適応的に圧縮符号化する第2の符号化手段(L0スベ
 クトルエンベロープ抽出回路208、配分決定回路2
 09、適応変調回路203、～203。)、サブ情報圧
 縮回路204、～204。)とを有してなることを特徴
 とするものである。

【0020】なお、本発明の多層符号化装置によって圧
 縮符号化された各チャネルのデジタルオーディオ信号
 は、伝送路を介して伝送されたり、記録媒体に記録さ
 れたりする。当該記録媒体として、例えば映画フィルム
 への記録や、光ディスク、光磁気ディスク、相変化型光
 ディスク、磁気ディスク等のディスク状記録媒体、磁気テ
 ープ等のテープ状記録媒体への記録、半導体メモリ、I
 Cカードなどへ記録される。

【0021】ここで、上記記録媒体として映画フィルム
 を用い、この映画フィルムへの記録を行う場合の上記各
 チャネルすは1～CH8は、例えば図2に示すようにス
 ピーカが配置されるデジタルサラウンドシステムに対
 応することになる。各スピーカに対応するチャネルは、
 センタ(C)チャネル、サブウーファ(SW)チャネ
 ル、レフト(L)チャネル、レフトセンタ(CL)チャ
 ネル、ライト(R)チャネル、ライトセンタ(CR)チャ
 ネル、レフトサラウンド(LB)チャネル、ライトサ
 ラウンド(RB)チャネルの8つである。

【0022】すなわちこの図2において、上記スピーカ
 配置に対応する各チャネルは、例えば当該映画フィル
 ムの画像記録領域から再生された画像が映写機(プロジェ
 クタ100)によって投影されるスクリーン101側に
 配置されたレフトスピーカ106、レフトセンタスピー
 104、センタスピーカ102、ライトセンタ
 スピーカ105、ライトスピーカ107、サラウンド
 レフトスピーカ108及び200、サラウンドライトスピー
 カ109及び201、サブウーファスピーカ103と
 対応するものである。

【0023】上記センタスピーカ102は、スクリーン
 101側の中央に配置され、センタチャネルのオーディ
 オデータによる再生音を出力するもので例えば俳優のせ
 りり等の最も重要な再生音を出力する。上記サブウー
 ファスピーカ103は、サブウーファチャネルのオーディ
 50

6

オデータによる再生音を出力するもので、例えば爆発音
 などの低域の音というよりは振動として感じられる音を
 効果的に出力するものであり、爆発シーンなどに効果的
 に使用されることが多いものである。上記レフトスピー
 カ106及びライトスピーカ107は、上記スクリー
 ン101の左右に配置され、レフトチャネルのオーディ
 オデータによる再生音とライトチャネルのオーディ
 オデータによる再生音を出力するもので、ステレオ音響効果
 を発揮する。上記レフトセンタスピーカ104とライトセ
 ンタスピーカ105は、上記センタスピーカ102と上
 記レフトスピーカ106及びライトスピーカ107との
 間に配置され、レフトセンタチャネルのオーディ
 オデータによる再生音とライトセンタチャネルのオーディ
 オデータによる再生音を出力するもので、それぞれ上記レ
 フトスピーカ106及びライトスピーカ107の補助的な
 役割を果たす。特にスクリーン101が大きく収容人数
 の多い映画館等では、座席の位置によって音場の定位が
 不安定になりやすいが、上記レフトセンタスピーカ10
 4とライトセンタスピーカ107を付加することによ
 20

り、音場のよりリアルな定位を作り出すのに効果を発揮
 する。さらに、上記サラウンドレフトスピーカ108と
 サラウンドライトスピーカ109は、観客席を取り囲む
 ように配置され、サラウンドレフトチャネルのオーディ
 オデータによる再生音とサラウンドライトチャネルのオ
 ディオデータによる再生音を出力するもので、聴覚音
 や触手、歓声に包まれた印象を与える効果がある。こ
 れにより、より立体的な音場を作り出すことができる。

【0024】図1に戻って、本発明の多層符号化装置
 について説明する。この図1において、各入力端子20
 30 1、～201。には、それぞれ対応する各チャネルのデ
 ジタルオーディオ信号が供給される。

【0025】各入力端子201、～201。に供給され
 た各チャネルのデジタルオーディオ信号は、対応する
 各圧縮符号化回路202、～202。に送られて、こ
 こで各チャネル毎にそれぞれ圧縮符号化される。なお、各
 圧縮符号化回路202、～202。の詳細な構成につい
 ては後述する。

【0026】各圧縮符号化回路202、～202。で圧
 縮符号化されたデジタルオーディオ信号は、メイン情
 報としてエントロピー符号化回路203、～203。に
 送られ、ここで、それぞれが可変長符号化される。ま
 た、上記圧縮符号化回路202、～202。でのデジ
 タルオーディオ信号の圧縮符号化に関連する後述する語
 長情報やスケールファクタの情報は、サブ情報としてサ
 ブ情報圧縮回路204、～204。に送られ、ここで各
 チャネル等のビット配分情報に基づいて圧縮される。

【0027】上記エントロピー符号化回路203、～2
 03。からのエントロピー符号化された各メイン情報
 は、適応変調回路205、～205。に送られると共に
 L0バスケットルエンベロープ抽出回路208に
 50

(5)

符号率 7-160292

7

も送られる。なお、図1では、チャネルC H2〜C H nの各エントロピ符号化回路203、〜203。からのエントロピ符号化されたメイン情報は、それぞれ対応する端子10、〜210。から、図示を省略している各チャネルC H2〜C H nに対応する適応量子化回路205、〜205。に送られると共に、端子215、〜215。を介して上記L o gスペクトラルエンベロープ抽出回路208に送られるようになっている。

【0028】上記エントロピ符号化された各メイン情報が供給されるL o gスペクトラルエンベロープ抽出回路208では、これら各チャネルのメイン情報からそれぞれエネルギーを抽出して、各チャネルのL o gスペクトラルエンベロープを抽出する。当該各チャネルのL o gスペクトラルエンベロープ情報は、上記配分決定回路209に送られる。

【0029】当該配分決定回路209では、上記L o gスペクトラルエンベロープ抽出回路208からの各チャネルのL o gスペクトラルエンベロープ情報に基づいて、各チャネルのメイン情報に対するチャネル間ビット配分情報と、各サブ情報に対するチャネル間ビット配分情報を決定する。

【0030】上記配分決定回路209からの上記メイン情報に対するチャネル間ビット配分情報は、適応量子化回路205、〜205。に送られ、上記サブ情報に対するチャネル間ビット配分情報は、上記サブ情報圧縮回路204、〜204。に送られる。なお、図1の例では、チャネルC H2〜C H nのメイン情報に対するチャネル間ビット配分情報は端子214、〜214。を介して図示を省略している適応量子化回路205、〜205。に送られ、チャネルC H2〜C H nのサブ情報に対するチャネル間ビット配分情報は端子217、〜217。及び端子216、〜216。を介してサブ情報圧縮回路204、〜204。に送られる。

【0031】上記適応量子化回路205、〜205。では、上記メイン情報に対するチャネル間ビット配分情報を用いて、上記各エントロピ符号化回路203、〜203。からのエントロピ符号化されたデジタルオーディオ信号を適応的に量子化する。

【0032】また、上記サブ情報圧縮回路205、〜205。では、上記サブ情報に対するチャネル間ビット配分情報を用いて、上記圧縮符号化回路202、〜202。からのサブ情報（諸長情報、スケールファクタ情報）を圧縮符号化する。

【0033】上記適応量子化回路205、〜205。とサブ情報圧縮回路205、〜205。からの各出力は、マルチプレクサ206に送られる。なお、チャネルC H2〜C H nの図示を省略している適応量子化回路205、〜205。からの各出力は、端子212、〜212。を介して上記マルチプレクサ206に送られ、チャネルC H2〜C H nのビット情報圧縮回路205、〜205

8

5、からの各出力は、端子213、〜213。を介して上記マルチプレクサ206に送られる。

【0034】当該マルチプレクサ206では、供給された各データをマルチプレクサして端子207からの出力する。この出力データが符号化データとして例えば記録媒体等に記録される。

【0035】また、図1の本実施例装置においては、例えば図3に示すように、上記圧縮符号化回路202、〜202。に対して供給する各チャネルのデジタルオーディオ信号から、少なくとも2チャネル毎（図3の例では全チャネル毎）に対応してそれぞれ設けたハイパスフィルタ222によって高域成分のみを取り出した後、これら高域成分を加算回路223によって加算して、端子225を介した当該高域成分の加算データに对应して、所定の処理、例えば圧縮符号化、エントロピ符号化及び量子化の処理を施すようにすることもできる。このとき、上記高域成分を取り出す各チャネルの入力デジタルオーディオ信号からは、それぞれローパスフィルタ221によって低域成分も取り出し、端子224を介して対応する圧縮符号化回路202、〜202。に送るようにする。その後、上記高域及び低域成分を取り出す各チャネルのうち、ある1つのチャネル（図3の例ではチャネルC H1）の上記マルチプレクサ206へ入力するメイン情報に対して、上記所定の処理を施した加算データを加算する処理（チャネル間クロスリンク処理）を行うようにする。

【0036】ここで、上記各チャネルの高域成分を加算して、ある1つのチャネルの低域成分に加算することを行うのは、以下の理由による。

【0037】すなわち、人間の耳は高域の成分に対する定位感が少なく、このため高域成分については例えば複数個のスピーカの中のいずれか1つのスピーカから出ていても人間にほとんどのスピーカから出てきているのと同じ聞き取り難いという性質がある。このため、複数チャネルのオーディオ信号の各高域成分を、そのうちの例えば1チャネルに对应するスピーカのみに送るようにしても、人間には各チャネルのオーディオ信号の高域成分が当該1つのスピーカのみから出力されているとは感じられない。したがって、上述のように、上記各チャネルの高域成分の音声を加算して、この加算データのある1つのチャネルの低域成分に加算することで、各チャネルの高域成分を1つのチャネル分に圧縮できることになる。

【0038】次に、上記図1に示した圧縮符号化回路202、〜202。の具体的な構成について説明する。

【0039】これら圧縮符号化回路202、〜202。では、オーディオPCM信号等の入力デジタル信号を、帯域分割符号化（SBC）、適応変換符号化（ATC）及び適応ビット配分（APC-A B）の各技術を用いて圧縮符号化している。

【0040】以下、図4を用いて説明する。図4に示す

9

本実施例の圧縮符号化回路202、202では、入力デジタル信号をフィルタなどにより複数の周波数帯域に分割すると共に、各周波数帯域毎に直交変換を行っている。得られた周波数域のスペクトルデータを、後述する人間の聴覚特性を考慮したいわゆる聴界帯域幅（クリティカルバンド）毎に適応的にビット配分して符号化している。この時、高域では聴界帯域幅を更に分割した帯域を用いる。もちろんフィルタなどによる非ブロッキングの周波数分割幅は等分割幅としてもよい。さらに、本実施例においては、直交変換の前に入力信号に応じて適応的にブロックサイズ（ブロック長）を変化させると共に、クリティカルバンド単位もしくは高域では聴界帯域幅（クリティカルバンド）を更に細分化したブロックでフローティング処理を行っている。このクリティカルバンドとは、人間の聴覚特性を考慮して分割された周波数帯域であり、ある特定の周波数境界の同じ強さの帯域帯パノイスによって当該帯域がマスクされるときそのノイズの持つ帯域のことである。このクリティカルバンドは、高域ほど帯域幅が広くなっており、上記0～2 kHzの全周波数帯域では例えば25のクリティカルバンドに分割されている。

【0041】すなわち、図4において、入力端子10には例えば0～2 kHzのオーディオPCM信号が供給されている。この入力信号は、例えばいわゆるQMF等の帯域分割フィルタ11により0～1 kHzと帯域1 kHz～2 kHzと帯域とに分割され、0～1 kHzと帯域の信号は同じくいわゆるQMF等の帯域分割フィルタ12により0～5 kHzと帯域と、5 kHz～1 kHzと帯域とに分割される。帯域分割フィルタ11からの1 kHz～2 kHzと帯域の信号は、直交変換回路の一例であるMDC T（Modified Discrete Cosine Transform）回路13に送られ、帯域分割フィルタ12からの5 kHz～1 kHzと帯域の信号はMDC T回路14に送られ、帯域分割フィルタ12からの0～5 kHzと帯域の信号はMDC T回路15に送られることにより、それぞれMDC T処理される。なお、各MDC T回路13、14、15では、各帯域毎に設けたブロック決定回路19、20、21により決定されたブロックサイズに基づいてMDC T処理がなされる。

【0042】ここで、上記ブロック決定回路19、20、21により決定される各MDC T回路13、14、15でのブロックサイズの詳細を図5のA及びBに示す。なお、図5のAには直交変換ブロックサイズが長い場合（ロングモードにおける直交変換ブロックサイズ）を、図5のBには直交変換ブロックサイズが短い場合（ショートモードにおける直交変換ブロックサイズ）を示している。この図5の具体例においては、3つのフィルタ出力は、それぞれ2つの直交変換ブロックサイズを持つ。すなわち、低域側の0～5 kHzと帯域の信号及び中域の5 kHz～1 kHzと帯域の信号に対して

(6)

待機半7-160292

10

は、長いブロック長の場合（図5のA）は1ブロック内のサンプル数を128サンプルとし、短いブロックが選ばれた場合（図5のB）には1ブロック内のサンプル数を32サンプル毎のブロックとしている。これに対して、高域側の1 kHz～2 kHzと帯域の信号に対しては、長いブロック長の場合（図5のA）は1ブロック内のサンプル数を256サンプルとし、短いブロックが選ばれた場合（図5のB）には1ブロック内のサンプル数を32サンプル毎のブロックとしている。このようにして短いブロックが選ばれた場合には各帯域の直交変換ブロックのサンプル数を同じとして高域低域時間分解能を上げ、なおかつブロック化に使用するウィンドウの傾斜を減らしている。なお、上記ブロック決定回路19、20、21で決定されたブロックサイズを示す情報は、後述の適応ビット配分符号化回路16、17、18に送られると共に、出力端子23、25、27から出力される。

【0043】再び図5において、各MDC T回路13、14、15にてMDC T処理されて得られた周波数領域のスペクトルデータあるいはMDC T係数データは、いわゆる聴界帯域（クリティカルバンド）または高域では更にクリティカルバンドを分割した帯域毎にまとめられて適応ビット配分符号化回路16、17、18に送られている。

【0044】適応ビット配分符号化回路16、17、18では、上記ブロックサイズの情報、及び聴界帯域（クリティカルバンド）または高域では更にクリティカルバンドを分割した帯域毎に割り当てられたビット数に応じて各スペクトルデータ（あるいはMDC T係数データ）を量子化（正規化して量子化）するようにしている。

適応ビット配分符号化回路16、17、18で符号化されたデータは、出力端子22、24、26を介して取り出される。また、当該適応ビット配分符号化回路16、17、18では、どのような信号の大きさに関係する正規化がなされたかを示すスケールファクタ情報と、どのようなビット長で量子化がされたかを示すビット長情報（語長情報）も求めており、これらも同時に出力端子22、24、26から出力される。

【0045】また、図5における各MDC T回路13、14、15の出力からは、上記聴界帯域（クリティカルバンド）または高域では更にクリティカルバンドを分割した帯域毎のエネルギー、例えば当該バンド内の各帯域の2乗平均の平方根を計算すること等により求められる、もちろん、上記スケールファクタそのものを以後のビット配分の高に用いるようにしてもよい。この場合には新たなエネルギー計算の演算が不要となるため、ハード規模の節約となる。また、各バンド毎のエネルギー代わりに、帯域幅のピーク値、平均値等を用いることも可能である。

【0046】ここで、上記適応ビット配分回路16、17、18のより具体的な構成を図6で説明する。この図

(7)

行幅 $7-160292$

11

6に示す適応ビット配分回路では、MDC T係数の大きさが各ブロック毎に求められ、そのMDC T係数が入力端子801に供給される。当該入力端子801に供給されたMDC T係数は、帯域毎のエネルギー算出回路803に与えられる。帯域毎のエネルギー算出回路803では、クリティカルバンド又は帯域においてはクリティカルバンドを更に再分割したそれぞれの帯域に関する信号エネルギーを算出する。帯域毎のエネルギー算出回路803で算出されたそれぞれの帯域に関するエネルギーは、エネルギー依存ビット配分回路804に供給される。

【0047】エネルギー依存ビット配分回路804では、使用可能総ビット発生回路802からの使用可能総ビット、本実施例では100Kbpsを用いて白色の量子化雑音を作り出すようなビット配分を行う。このとき、入力信号のトリナリティが高ほど、すなわち入力信号のスペクトルの凸凹が大きほど、このビット量が上記128Kbpsに占める割合が増加する。なお、入力信号のスペクトルの凸凹を検出するには、隣接するブロックのプロックローテイング係数の絶対値の相を指標として使う。そして、求められた使用可能ビット量につき、各帯域のエネルギーの対数値に比例したビット配分を行う。

【0048】聴覚許容雑音レベルに依存したビット配分回路805は、先ず上記クリティカルバンド毎に分割されたスペクトルデータに基づき、いわゆるマスキング効果等を考慮した各クリティカルバンド毎の許容ノイズ量を求め、次に聴覚許容雑音スペクトルを与えるように使用可能総ビットからエネルギー依存ビットを引いたビット分が配分される。このようにして求められたエネルギー依存ビットと聴覚許容雑音レベルに依存したビットは加算されて、図4の適応ビット配分符号化回路16、17、18によるクリティカルバンド毎もしくは帯域においてはクリティカルバンドを更に複数帯域に分割した帯域に割り当てられたビット数に応じて各スペクトルデータ（あるいはMDC T係数データ）を再量子化するようになっている。このようにして符号化されたデータは、図4の出力端子22、24、26を介して取り出される。

【0049】さらに詳しく上記聴覚許容雑音スペクトル依存のビット配分回路805中の聴覚許容雑音スペクトル算出回路について説明すると、MDC T回路13、14、15で得られたMDC T係数が上記許容雑音算出回路に与えられる。

【0050】図7は上記許容雑音算出回路をまとめて説明する一具体例のブロック構成を示すブロック回路図である。この図7において、入力端子52には、MDC T回路13、14、15からの周波数領域のスペクトルデータが供給されている。

【0051】この周波数領域の入力データは、帯域毎の

12

エネルギー算出回路522に送られて、上記クリティカルバンド（聴覚帯域）毎のエネルギーが、例えば当該バンド内での各極値と2乗の総和を計算すること等により求められる。この各バンド毎のエネルギーの代わりに、極値のピーク値、平均値等が用いられることもある。このエネルギー算出回路522からの出力として、例えば各バンドの総極値のスペクトルは、一般にバークスペクトルと称されている。図8はこのような各クリティカルバンド毎のバークスペクトルSBを示している。ただし、この図8では、図示を簡略化するため、上記クリティカルバンドのバンド数を12バンド（B1～B12）で表している。

【0052】ここで、上記バークスペクトルSBのいわゆるマスキングに於ける影響を考慮するために、該バークスペクトルSBに所定の重み付け関数を掛けて加重するような量込み（コンボリューション）処理を施す。このため、上記帯域毎のエネルギー算出回路522の出力すなわち該バークスペクトルSBの各値は、量込みフィルタ回路523に送られる。該量込みフィルタ回路523は、例えば、入力データを順次遅延させる複数の遅延素子と、これら遅延素子からの出力にフィルタ係数（重み付け関数）を乗算する複数の乗算器（例えば各バンドに対応する25個の乗算器）と、各乗算器出力の総和をとる総和加算器とから構成されるものである。なお、上記マスキングとは、入間の聴覚上の特性により、ある信号によって他の信号がマスクされて聞こえなくなる現象をいうものであり、このマスキング効果には、時間領域のオーディオ信号による時間軸マスキング効果と、周波数領域の信号による同時刻マスキング効果がある。これらのマスキング効果により、マスキングされる部分にノイズがあったとしても、このノイズは聞こえないことになる。このため、実際のオーディオ信号では、このマスキングされる範囲内のノイズは許容可能なノイズとされる。

【0053】ここで、上記量込みフィルタ回路523の各乗算器の乗算係数（フィルタ係数）の一具体例を示すと、任意のバンドに対応する乗算器Mの係数を1とすると、乗算器M-1で係数0.15を、乗算器M-2で係数0.0019を、乗算器M-3で係数0.0000086を、乗算器M+1で係数0.4を、乗算器M+2で係数0.6を、乗算器M+3で係数0.007を各遅延素子の出力に乗算することにより、上記バークスペクトルSBの量込み処理が行われる。ただし、Mは1～25の任意の整数である。

【0054】次に、上記量込みフィルタ回路523の出力は引算器524に送られる。該引算器524は、上記量込んだ領域での後述する許容可能なノイズレベルに対応するレベル α を求めるものである。なお、当該許容可能なノイズレベル（許容ノイズレベル）に対応するレベル α は、後述するように、適コンボリューション処理を

(8)

特開平7-160292

13

行うことにより、クリティカルバンドの各バンド毎の許容ノイズレベルとなるようなレベルである。ここで、上記引算器524には、上記レベル α を求めるための許容周波数(マスキングレベルを表現する周波数)が供給される。この許容周波数を増減させることで上記レベル α の制御を行っている。当該許容周波数は、次に説明するような $(n-a)$ 周波数発生回路525から供給されているものである。

【0055】すなわち、許容ノイズレベルに対応するレベル α は、クリティカルバンドのバンドの低域から順に与えられる番号を i とすると、次の式で求めることができる。

$$\alpha = S - (n - a \cdot i)$$

この式において、 n 、 a は定数で $a > 0$ 、 S は畳込み処理されたバースベクトルの強度であり、式中 $(n-a \cdot i)$ が許容周波数となる。例として $n = 38$ 、 $a = -0.5$ を用いることができる。

【0056】このようにして、上記レベル α が求められ、このデータは、割算器526に伝送される。当該割算器526では、上記畳込みされた領域での上記レベル α を逆コンボリューションするためのものである。したがって、この逆コンボリューション処理を行うことにより、上記レベル α からマスキングスレッシュホールドが得られるようになる。すなわち、このマスキングスレッシュホールドが許容ノイズベクトルとなる。なお、上記逆コンボリューション処理は、複雑な演算を必要としないが、本実施例では簡略化した割算器526を用いて逆コンボリューションを行っている。

【0057】次に、上記マスキングスレッシュホールドは、合成回路527を介して減算器528に伝送される。ここで、当該減算器528には、上記帯域毎のエネルギー抽出回路524からの出力、すなわち前述したバースベクトルS Bが、減算回路529を介して供給されている。したがって、この減算器528で上記マスキングスレッシュホールドとバースベクトルS Bとの減算演算が行われることで、図3に示すように、上記バースベクトルS Bは、該マスキングスレッシュホールドM Sのレベルで示すレベル以下でマスキングされることになる。なお、減算回路529は上記合成回路527以前の各回路での減算量を考慮してエネルギー抽出回路524からのバースベクトルS Bを減算させるために設けられている。

【0058】当該減算器528からの出力は、許容雑音補正回路530を介し、出力端子531を介して取り出される。例えば配分ビット数情報が入力記憶されたROM等(図示せず)に読まれる。このROM等は、上記減算回路528から許容雑音補正回路530を介して得られた出力(上記各バンドのエネルギーと上記ノイズレベル設定手段の出力との差分のレベル)に応じ、各バンド毎の配分ビット数情報を出力する。

14

【0059】このようにしてエネルギー値をビットと雑音許容雑音レベルに依存したビットは加算されてその配分ビット数情報を用いて当該減算器528で配分符号化回路16、17、18では符号化が行われる。

【0060】すなわち要約すれば、適化ビット配分符号化回路16、17、18では、上記クリティカルバンドの各バンド帯域(クリティカルバンド)最もしくは高域においてはクリティカルバンドを更に複数帯域に分割した帯域のエネルギーもしくはピーク値と上記ノイズレベル設定手段の出力との差分のレベルに応じて配分されたビット数で上記各バンド毎のスペクトルデータを量子化することになる。

【0061】ところで、上述した合成回路527での合成の際には、最小可聴カーブ発生回路532から供給される図9に示すような人間の聴覚特性であるいわゆる最小可聴カーブR Cを示すデータと、上記マスキングスレッシュホールドM Sとを合成することができる。この最小可聴カーブにおいて、聴覚絶対レベルがこの最小可聴カーブ以下ならば該雑音は聞こえないことになる。この最小可聴カーブは、コーディングが同じであっても例えば再生時の再生ボリュームの違いで異なるものとなり、現実的なデジタルシステムでは、例えば16ビットダイナミックレンジの音楽の送り方にはほとんど違いがないので、例えば4 kHz付近の最も耳に聞こえやすい周波数帯域の量子化雑音が聞こえないとすれば、他の周波数帯域ではこの最小可聴カーブのレベル以下の量子化雑音は聞こえないと考えられる。したがって、このように例えばシステムを持つダイナミックレンジの4 kHz付近の雑音が聞こえない使い方をすると仮定し、この最小可聴カーブR CとマスキングスレッシュホールドM Sとを共に合成することで許容ノイズレベルを得るようにすると、この場合の許容ノイズレベルは、図9の斜線で示す部分までとすることができようになる。なお、本実施例では、上記最小可聴カーブの4 kHzのレベルを、例えば20 dB相当の最低レベルに合わせている。また、この図9は、信号スペクトルS Sも同時に示している。

【0062】また、上記許容雑音補正回路530では、補正情報出力回路533から送られてくる例えば等ラウドネスカーブの情報に基づいて、上記減算器528からの出力における許容雑音レベルを補正している。ここで、等ラウドネスカーブとは、人間の聴覚特性に関する特性曲線であり、例えば1 kHzの音量と同じ大きさに聞こえる各周波数での音の音圧を求めて曲線で結んだもので、ラウドネスの等感度曲線とも呼ばれる。またこの等ラウドネス曲線は、図9に示した最小可聴カーブR Cと略同じ曲線を描くものである。この等ラウドネス曲線においては、例えば4 kHz付近では1 kHzのときより音圧が8~10 dB高くなって1 kHzとと同じ大きさに聞こえ、逆に、500 Hz付近では1 kHzのときの音圧

(9)

符号率 7-160292

15

よりも約15dB高くないと同じ大きさにならぬ。このため、上記最小可聴カーのレベルを超えた雑音（許容ノイズレベル）は、該等ラウドネス曲線に定じられたカーブで与えられる周波数特性を持つようにするのが良いことがわかる。このことから、上記等ラウドネス曲線を考慮して上記許容ノイズレベルを修正することは、人間の聴覚特性に適合していることがわかる。

【0063】以上述べた聴覚許容雑音レベルに依存したスペクトル形状を使用可能ビット128Kbpsの内のある割合を用いるビット配分をつくる。この割合は入力信号のトナリリティが高くなるほど減少する。

【0064】次にビット量分割手法について説明する。図6に戻って、MDC T回路出力が供給される入力端子801からの信号は、スペクトルの滑らかさ算出回路808にも与えられ、ここでスペクトルの滑らかさが算出される。本実施例では、信号スペクトルの絶対値の隣接値の差の絶対値を、信号スペクトルの絶対値の和で割った値を、上記スペクトルの滑らかさとして算出している。

【0065】上記スペクトルの滑らかさ算出回路808の出力は、ビット分割率決定回路809に与えられ、ここでエネルギー依存のビット配分と、聴覚許容雑音スペクトルによるビット配分のビット分割率が決定される。ビット分割率はスペクトルの滑らかさ算出回路808の出力値が大きいほど、スペクトルの滑らかさが低いと考えて、エネルギー依存のビット配分よりも、聴覚許容雑音スペクトルによるビット配分に重点をおいたビット配分を行う。ビット分割率決定回路809は、それぞれエネルギー依存のビット配分及び聴覚許容雑音スペクトルによるビット配分の大きさをコントロールするマルチプライヤ811及び812に対してコントロール出力を送る。ここで、仮にスペクトルが滑らかであり、エネルギー依存のビット配分に重きをおくように、マルチプライヤ811へのビット分割率決定回路809の出力が0.8の値を取ったとき、マルチプライヤ812へのビット分割率決定回路809の出力は1-0.8=0.2とする。これら2つのマルチプライヤの出力はアダー806で足し合わされて最終的なビット配分情報となって、出力端子807から出力される。

【0066】次に、図10には、上記図4の圧縮符号化回路に対応する伸張復号化回路の構成を示す。

【0067】この図10において、各帯域の量子化されたMDC T係数は、入力端子122、124、126に与えられ、使用されたブロックサイズ情報は、入力端子123、125、127に与えられる。復号化回路116、117、118では適応ビット配分情報を用いてビット割当を解除する。

【0068】次に、1MDC T回路113、114、115では周波数領域の信号が時間領域の信号に変換される。これらの部分帯域の時間領域信号は、1QMF回路

16

112、111により、全体域信号に復号化される。その後、1QMF回路111、112で帯域合成がなされ、出力端子110から出力される。

【0069】

【発明の効果】上述したように、本発明の多層符号化装置においては、第1の符号化手段で各チャネルのディジタルオーディオ信号を圧縮符号化した後、この第1の符号化手段の出力符号化信号に対して、さらに第2の符号化手段によってチャネル毎のエネルギーに規定した比率で、各チャネルの情報量を割り当てる符号化を行うことにより、チャネル間のビット配分と高圧縮率を可能としている。

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明実施例の多層符号化装置の概略構成を示すブロック回路図である。

【図2】8チャネルディジタルサラウンドシステムにおけるスピーカ配置を説明するための図である。

【図3】チャネル間クロストークを行う主要構成要素の概略構成を示すブロック回路図である。

【図4】本実施例の圧縮符号化回路の構成例を示すブロック回路図である。

【図5】圧縮符号化回路での信号の周波数及び時間分割を示す図である。

【図6】情報信号の大きさ及び聴覚許容雑音スペクトルの2番を用いたビット配分手法を説明する構成を示すブロック回路図である。

【図7】許容雑音レベルを求める構成を示すブロック回路図である。

【図8】各帯域の信号レベルによるマスキングスレショールドの例を示す図である。

【図9】情報スペクトル、マスキングスレショールド、最小可聴限を示す図である。

【図10】本実施例の圧縮符号化回路に対応する伸張復号化回路の構成例を示すブロック回路図である。

【符号の説明】

202、~202、... 圧縮符号化回路
203、~203、... エントロピー符号化回路
204、~204、... サブ情報圧縮回路
205、~205、... 適応量子化回路
206、... マルチプレクサ
208、... ログスペクトラルエンベロープ検出回路
209、... 分割決定回路
221、... ローパスフィルタ
222、... ハイパスフィルタ
223、... 加算回路
111、112、... 帯域分割フィルタ
13、14、15、... MDC T回路
16、17、18、... 適応ビット配分符号化回路
19、20、21、... ブロックサイズ決定回路
22、24、26、... 符号出力端子

(10)

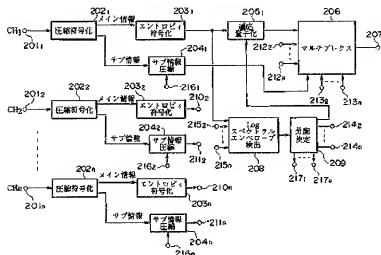
特開平 7-160292

17

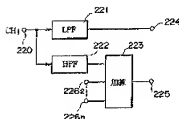
18

- 23, 25, 27・・・ブロックサイズ情報出力端子
 116, 117, 118・・・適応ビット配分復号化回路
 113, 114, 115・・・IMDCT回路
 112, 111・・・IQMF回路
 520・・・許容雑音算出回路
 521・・・許容雑音算出回路入力端子
 522・・・帯域毎のエネルギー抽出回路
 523・・・畳込みフィルタ回路
 524・・・引算器
 525・・・n-a1間数発生回路
 526・・・割算器
 527・・・合成回路
- * 528・・・減算器
 530・・・許容雑音補正回路
 532・・・最小可聴カーブ発生回路
 533・・・補正情報出力回路
 801・・・MDC T回路出力端子
 802・・・使用可能終ビット発生回路
 803・・・帯域毎のエネルギー算出回路
 804・・・エネルギー依存のビット配分回路
 805・・・聴覚許容雑音レベル依存のビット配分回路
 10 806・・・アダー
 807・・・各帯域のビット割当量出力端子
 808・・・スペクトルの得られさ算出回路
 809・・・ビット分割率決定回路
 * 811, 812・・・マルチプライヤ

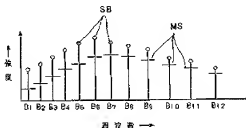
【図 1】



【図 3】



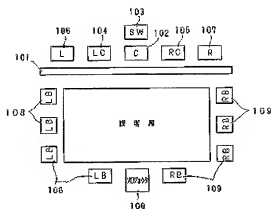
【図 8】



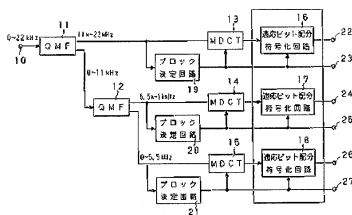
(11)

特開平 7-160292

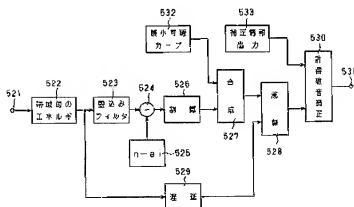
【図2】



【図4】



【図7】



(13)

特開平7-160292

【圖10】

